



3法人、3個人、3大使の入会を承認

常任理事会

民間外交推進協会（FEC）は、5月19日に常任理事会を開催した。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今次常任理事会は、書面による議決権の行使をもって以下の議案を承認可決した。第1号議案「会員の入会承認の

件」では、前回の常任理事会（1月19日開催）以降に入会申し込みのあった法人3社、個人3人、駐日大使3人がそれぞれ法人会員、個人会員、名誉会員として承認された。第2号議案「令和2年度定時総会招集の件」では、6月11日の定時総会の開催と上程される議案が承認された。第3号議案「委員会委員長等委嘱の

件」では、任期満了に伴う各委員会の委員長、副委員長、顧問、委員の再任を委嘱することが承認された。第4号議案「顧問、相談役及び参与委嘱の件」では任期満了に伴う当協会の顧問、相談役、参与の再任を委嘱することが承認された。第5号議案「特別会員委嘱の件」では、任期満了に伴う当協会の特別会員の

再任を委嘱することが承認された。

報告事項として▷通常理事会招集及び付議事項の件▷会員懇親会の件▷役員退任の件▷会員退会の件▷支払い実施報告の件▷訪問団延期の件▷要人等を迎える懇談会等開催の件▷次回常任理事会開催の件について報告し、各報告内容について了承された。

新型コロナウイルスと危機管理

初動全力・少数精鋭が肝要

特別寄稿

川崎重工業(株)顧問・前防衛省統合幕僚長 河野 克俊

新型コロナウイルスの猛威は、我が国においても3月に入って急速に激しさを増し、遂に新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき、4月7日、7都府県に緊急事態宣言が発せられ、16日には全国に拡大された。5月25日には全面的に解除されたが、ここで、危機管理の観点から今までの経緯を振り返ってみたい。

WHOの当初の評価は極めて甘く、2月に入っても「パンデミックと呼ぶのは時期尚早」「人から人への感染は確認されていない」等と述べ、中国の対応にも甘い評価を下していた。武漢市の病院が新型コロナウイルスを確認したのが12月8日であるが、11月中旬には感染が確認されていたとの見方もある。中国当局の情報隠蔽と言われてもおかしくない対応によって今回のパンデミックは引き起こされたと言えなくもない。当初の段階で情報を全面的に開示していれば、初期の段階で国際的な協力によってかなりの程度抑え込めた可能性がある。今回の我が国政府の対応に批判の声もかなりあるが、根本である中国が情報を隠蔽していたとなれば対応が遅れるのも致し方ない面があったと思う。

ただ、状況が明らかになるにつれて、危機対応の面で問題がなかったかといえは出遅れた感は否めない。

まず、「ダイヤモンド・プリンセス」の事案は、船長はイタリア人、船籍は英国、運航会社は米国であり、日本の領海内ではあったが日本のみの責任で処理をする事案ではなく、関係者は与えられた範囲でよくやられたと思う。ただ、この時点で最悪の事態を想定した対応、すなわち有事として対応すべきであったのではない。私の印象では厚生労働省が前面に出られて対応していたと思うが、当然厚生労働省の役割は大きい、この問題は厚生行政の一貫ではなく、やはり国全体の危機対応として取り組むべきであ

ったと思う。聞くところによれば、当初、2月5日の対策本部会合に防衛省・自衛隊が入っていなかったとのことである。防衛省・自衛隊はまさに有事に備えた組織であり、この事態が単なる厚生行政の範疇ではなく有事との認識であれば防衛省・自衛隊を排除する選択肢はないと思う。したがって、本件は、厚生労働省はもちろんのこと防衛省・自衛隊を含めた危機対応チームを編成し、統一指揮もしくは調整の下で対応すべきであったと思う。

危機管理の要諦は、色々あると思うが、私は経験から次の2点が重要であると考えている。

第一は、「初動全力」である。すなわち最悪の事態を想定してスタートすることだ。東日本大震災の際には「想定外」という言葉がよく使われたが、危機対応において「想定外」はあってはならない。新型コロナウイルス対応で言えば、例えば水際対策として、入国拒否もしくは入国制限をかける場合、最悪の事態を想定し、大きく入国拒否、制限をか

けて、それから確認・評価をして、順次緩めていくことが危機対応の基本的アプローチだと思う。

今回の政府の対応は、感染症の専門家の助言に基づき、経済的側面も考慮した上での判断だと思うので、それはそれなりに合理性があるものと思うが、危機対応の基本的アプローチは先ずは網を大きく被せ、兵力の逐次投入は避けるべきだということである。

第二は、指揮系統はシンプルにし、組織に機動性を持たせるということである。そのためには極力少数精鋭でいくべきである。私は、東日本大震災の際は自衛隊の統合幕僚副長であり、統合幕僚を補佐する立場にあったが、実際に救援活動に当たっている災害派遣部隊はもちろんのこと各部長との間に入ることを極力避けて指揮命令が迅速に行われることに心がけた。当然平時は順序を追って報告すべきであるが、危機の際はとにかく結節を少なくすることが肝要だと思う。ナンバー・ツーの立場は難しく、人それぞれ考えがあると思うが、私は自分の経



海上自衛隊幹部候補生学校第28期卒。2004年3月佐世保地方総監部幕僚長、05年7月海上幕僚監部監理部長、06年3月海上幕僚監部総務部長、8月海上幕僚監部防衛部長、08年3月掃海隊群司令、11月護衛艦隊司令官、10年7月統合幕僚副長、11年8月自衛艦隊司令官、12年7月海上幕僚長、14年10月統合幕僚長、19年4月退官。現在は川崎重工業(株)顧問。

験からそのようにした。私は統合幕僚長が手が回らないことを代わりにやることに徹した。その観点から言えば、当時の政府は東日本大震災の際に参与を増やし、いくつもの会議体を作ったが、これは危機対応としてはあまり適切ではなかったように思う。危機的状況となった場合、トップは不安にかられ自分の周りに人を集め、会議が危機対応の目的化する傾向に陥りやすい。そこは堪えて単純明快で行くべきであり、危機対応において複雑怪奇はけがの元だと思う。

自衛隊「基本の徹底」で成果

新型コロナウイルスへの対応では、自衛隊も投入された。

まず、中国湖北省から在留邦人を帰国させるチャーター機の第2便には、自衛隊中央病院の陸上自衛隊看護官2名が派遣された。そして、先に述べた「ダイヤモンド・プリンセス」ではPCR用検体採取支援等を行い、ピーク時には医官20名、薬剤官3名、看護官18名が活動し、陸上自衛隊員約40名が患者等の搬送支援を行った。その後も、隔離された患者に対する生活支援、空港での検疫、さらには自衛隊中央病院では積極的に患者を受

け入れたが、今のところ一人の院内感染者も出していない。

このことに対し、マスコミの取材を受けた自衛隊中央病院長は、「基本の徹底です」と答えている。自衛隊中央病院に限らず、自衛隊では訓練はもとより武器等を扱うため「安全守則」がその分野ごと策定され、至るところに掲示されている。この内容を突き詰めるとやはり「基本の徹底」なのである。自衛隊中央病院では「手洗い、うがい」はもちろんのこと、防護服の着脱の訓練を日々やっている。特に、防護服は脱ぐ時が要注意であ

る。防護服を着る時はこれから危険な作業に着手することになるため、注意深く、慎重に行うが、脱ぐ時は危険な作業を終えたという安心感から緊張が緩みがちである。ここを厳に戒めているのである。戦闘の一形態としてNBC（核、生物、化学）戦というものがある。もちろん、自衛隊がNBC戦を遂行する訳ではなく、それらの脅威からの徹底した防護を行わなければならない。そのための研究・訓練をしているわけであるが、今回その成果が出ているものと思う。

私とブルー

人間社会にも問われる「忠義」

特別寄稿

ミノルホールディングス(株)代表取締役 田中 俊昭

昨年の12月27日、その日は私と彼の永遠の別れの日になってしまった。わずか6年ほどの付き合いではあったが、彼が私に与えた影響は計り知れないほど大きいものだった。

「彼」というのは「ブルー」という名のフラット・コートド・レトリバー犬である。ペットと飼い主という関係ではあったが、私は敬意を表し、あえて「彼」と呼ばせてもらう。それほどの存在だ。

我が家に彼が来たのは、2014年の正月のことだった。当時、彼の年齢は3歳と8か月。飼いはじめには、やや年をとっていた年齢かもしれない。遅い出会いは、彼の生い立ちに理由があった。

生い立ちというのは次のようなものだった。

彼が生まれたのは2010年4月10日。最初の飼い主は、とある若夫婦だった。

その若夫婦には子供がなかったこともあり、ワンちゃんを飼おうとブルーを飼うようになったという。非常に可愛がっていたのだが、飼いはじめて1年ほど経ったところに、ようやく子宝に恵まれた。実にめでたい話である。ところが、そのお子さんは犬アレルギーをおこしてしまった。やむを得ず、ブルーを手放さなくてはならなくなった。

困った若夫婦が里親を探すなか、候補は何人か現れたそうだが、フラット・コートド・レトリバーはかなりの大型犬。当時、彼の体重は42kgもあったという。大きすぎて飼えないというのが実情だった。もはや保健所に預けるしかないのか、となった時、それを知った若夫婦の友人が助け舟を出す。友人の祖母が大好きで、面倒を見ると手を挙げてくれたのだ。

保健所は逃れたブルーだったが、このお祖母ちゃんは82歳のご高齢。とても42kgの大型犬を散歩させることができない。やむを得ず近所のオバさん（失礼！）に散歩を依頼することになった。それでも約1年半はここで暮らしていた。

2013年、ここで私の登場となるのだが、実に偶然が重なって彼と出会うことになった。

私がクルマを買い替える際、大型犬も飼うことを考えていた。大型犬と一緒にドライブをして休日の余暇を過ごす。想像しただけでも楽しそうではないか。心躍るなか、そんな話を自宅近所の寿司屋でしていると、彼の話が出てきた。近所に大型犬を預かっている家があるが、高齢で散歩も大変そうだという。私は彼に会うことにした。

会ってみると、もう3歳8か月に達し

ていたが、非常にいい子だった。これは、と縁を感じ、里親として預かることを決め、早速、翌年の正月から飼うことにしたのである。

彼はやはり散歩が足りなかったのか、少し肝臓が弱かった。医者に連れていくと、太りすぎであるという。将来、歩けなくなる可能性もあるから、30kg前後まで体重を落とすよう叱られてしまった。

ちょうどその頃、私も体重が96kgもあり、医者から痩せるよう言われていた。彼のことも自分のことを言われているようで、気恥ずかしくなり、一念発起して2人で痩せて健康になろう！と散歩を始めたのだ。

それからは彼と散歩生活が始まった。夏は朝5時から2時間、冬も7時半から2時間、毎日散歩をした。私が休みの日には1日中散歩である。4年もこんな生活をしていると、彼は32kgまで体重が下がり、私も83kgまで落ちていた。なかなかダイエットできなかつた私にとって、彼は感謝してもきれない存在だ。

私が「彼」と敬意を払うようになったエピソードがいくつかある。

私の自宅と、彼が元々住んでいたお祖母ちゃんの家は、40～50mくらいしか離れていない。少し横道に入るので、なかなか家の前を通ることがなかったのだが、ウチに来て半年くらい経ったころだろうか。たまたま散歩の際に初めて元飼い主の家の前を通った。

1年半も暮らした家である。私はどうするのかと、様子を見ることにした。家に入ろうとしても不自然ではない。すると彼は、家の前にちょこんと座り、進行方向を見据えて家のほうは見ない。私は「どうしたんだ」と声をかけたのだが、彼は黙って何かを考えている。3分ほど経ったか、彼はすくっと立ち上がった。家を顧みることなく、まっすぐに歩き始めたのだ。

これには私も感激というか、感動というか、胸に何かこみ上げるものがあった。元々暮らした場所である。元飼い主のそばに行ってもおかしくはないのだ。それを断ち、私との歩みを選んだ姿に、何かを教えてもらったような気がしたのだ。彼は、主人が代わったことを知っている。「忠義」である。感動せずにはいられなかった。

それから、こういうこともあった。もともと前述のオバさんが毎日散歩していたこともあり、私がブルーを引き取ってから彼女もたまに散歩させてくれたと、週に数回、散歩に連れ出してくれていた。ところがある日、彼は散歩に行かなくなったのだ。家内が言うには、「散

歩に行きたがらない」らしい。拒否しているのだ。

私は、そのオバさんが元飼い主のお祖母ちゃんの家、彼を連れて行っているのではないかと思った。彼にしてみれば、元飼い主のところに行くことで、私に怒られるのではないかと、戻されるのではないかと、いろいろな考えがあったのかもしれない。行けばおいしいものを食べさせてくれるのだろうが、行きたくないから散歩にいかないという判断になったのではないだろうか。

後日、家内が確認すると、どうやら予想通りだったらしい。ご近所なので、散歩中にばったり会うこともある。すると彼は私の後ろに隠れるように避ける。私にすれば世話をしてくれた方に申し訳ない気持ちもあるのだが、反面、私を飼い主として尊重していることに嬉しい気持ちになってしまった。

飼い主に対する忠義は私に対してだけではない。家内と散歩に行ったとき、自車が家内につっこみそうになったことがあったという。すると彼は前に立ち上がり、家内を守ろうとしたそう。これには家内も感心しきりで、その利口さと忠義の厚さに感動していた。

彼とは静岡県の下田に2人で何度も出かけた。私にとって下田は非常に大切な地である。15、16年ほど前、知人から下田の山を譲ってくれるという話があり、実際に行ってみると、都会とは違って海や山、自然がたくさん残っている。美しい景色とともに、地元の人の温かさも強く印象に残った。ここは終の棲家になると考え、余生は下田で過ごすことに決めている。その下田に別荘を構え、毎月、一度は彼と下田に行った。

夜になれば私は下田の町に行き、食事をしたり飲むこともあるのだが、彼を連れて歩いて店まで出かける。「ワンちゃん可」のお店に行き、彼のおやつに好物のキャベツの煮ものをもらって帰る。次の日の朝、散歩に行くと、彼は1度しか行っていないその店に私を引っ張っていき、店の前で開店を待とうとするのだ。これが1件ではなく、スナックなど私が楽しんだ店を覚え、朝からそこに私を連れていこうとする。

南伊豆の弓ヶ浜では、朝早くだけれもない時間にリードを外した。彼は浜をずっと走り続け、喜んでいただようだ。一方で、下田の山でも駆け回っていた。見当たらないのでどこに行ったかと口笛を吹くと、どこからともなく駆け寄ってくる。本来はこうした自然のなかで生かすのが、彼にとって幸せなのだろうなと思った。



長崎県出身。ミノルホールディングスは、1982年に設立した田中建設工業グループの持株会社。東京・新橋を拠点に賃貸ビルを所有する。伊豆下田ではリゾートホテルを運営するほか、森林保護活動に取り組み、青少年育成を目的としたキャンプ場の設置を計画している。2012年からFEC法人会員。

下田では一緒にベッドに寝るし、雨が降ってもレインコートを着て散歩に出かけた。彼との思い出は、ほとんどが散歩の中で生まれている。いろんなところに出かけたものだ。

話もした。もちろんはっきり言葉を交わすわけではないが、私が問いただせば必ず何か返事をする。感心することばかりだった。

昨年12月27日、夜9時15分に彼は亡くなった。その日、私は会社の納会で、帰宅が9時10分だった。私の帰宅を確認し、眠るように息を引き取った。最後まで飼い主に対する忠義を示してくれた。

死因は肝臓がん。犬の場合、がんの早期発見は難しく、ひどくなってから見つかる場合がほとんどだが、幸い、彼は早めに見つかり、急激にひどくならないよう気を遣いながら生活できた。がんが発覚してから2年間も生き、それも亡くなる3日前まで元気そうに散歩をしていた。医者からは、食べられなくなってから亡くなるまで介護が大変になることが多いと聞かされていたが、体調を崩して亡くなるまでわずか3日。医者は、迷惑もかけず眠るように亡くなったことを「いさぎよい」という言葉を使った。

彼に教えられるのは、やはり「忠義」だ。人間だっておいしい話があればそちらに靡(なび)くだろう。忠義は、いま人間社会にもっとも問われているもののような気がする。

コロナ禍のなか、国民は国に対して忠義を立てて自粛してきたではないか。政治家も国民に対して、また日本人として忠義を尽くさねばならない。ブルーの亡くなる寸前までの忠義を感じたからこそ、人間だって負けてはいけなと感じた。

大型犬の平均寿命は8歳くらいらしい。10歳近くまで生き、ギリギリまで元気に一緒に時間を過ごせたことがせめてもの慰めか。わずか6年間ではあったが、一緒に過ごした彼の忠義に、感謝と敬意を表したい。

Hotel & Resort
SHIMODA BAY
KUROSHIO
下田ベイリゾート

ご予約：0558-27-2111 <http://www.baykuro.co.jp> 静岡県下田市柿崎4-1

医療の進歩に貢献するサクラグループ
〈皆様をウイルスから守る!〉 〈がんの迅速診断に!〉

サクラ精機株式会社 <http://www.sakurajp.com/> サクラファインテックジャパン株式会社 <http://www.sakura-finetek.com/>

サクラグローバルホールディング株式会社 <http://www.sakuraghc.com/> TEL.03-3270-1666

Ambassadors'
Views

日本の人道支援に感謝



駐日コンゴ共和国大使

フェリックス・ンゴマ氏

＜略歴＞ 1957年生まれ。カナダ・ラヴァル大学卒、北京語言大学修士（中国研究）。83年外務省入省。在中国コンゴ共和国大使館で二等書記官、経済参事官、公使を歴任。駐インド大使を経て、18年から駐日大使。

■初代駐日大使として日本とコンゴ共和国の関係をどう見えていますか。

この大きな国で、二国間関係の発展という重要な使命を実現する最初の大使を務めるのはとても名誉なことです。日本はコンゴ共和国に多くの分野で貴重な経済支援を実施しています。美しい日本に2年前に着任して以来、多面的な支援をいただいた外務省や国際協力機構（JICA）、その他の技術協力機関に感謝いたします。日本とコンゴ共和国の外交関係は1960年に樹立し、両国の関係は友好的に発展してきました。政治分野では要人の往来が活発化しています。2018年に日本コンゴ友好議員連盟が発足し、桜田義孝衆議院議員を団長とする連盟所属議員団がコンゴ共和国の首都ブラザビルを訪

問し、クレマン・ムアンバ首相、商業大臣、国会議長と意見交換しました。さらに同年8月、ギルバート・オンドongo経済・産業・公共資産大臣らのコンゴ共和国代表団が第7回アフリカ開発会議（TICAD7）閣僚会議参加のために訪日し、河野太郎外務大臣（当時）との会談により二国間関係が深まっています。

■日本の経済協力についてお話しいただけますか。

コンゴ共和国に対する日本政府の支援は、生活環境改善と経済基盤整備を目的とし、保健や教育などの分野で活発です。特に人道支援面において日本は大きく貢献しています。日本は小学校の食堂を支援するためにコンゴの世界食糧計画（WFP）に定期的に寄付を行っていま

す。この計画によりコンゴの子供たちの栄養状態が改善され、食糧安全保障が確保されます。寄付金は特定地域の飲料水の改善にも利用可能です。さらに、大使館と日本の所管官庁の協力により、衛生サービスの改善などの取り組みを開始する予定です。また18年に、第2の都市ポワント・ノワールに零細漁業支援センターが建設され、水産物の品質向上に向けて日本の専門家が零細漁民に啓発活動を行っています。人材育成協力では、「ABEイニシアチブ（アフリカ産業人材育成計画）」を通じて多くのコンゴ人学生が日本で研修を受けました。

■昨年8月のTICAD7以降、両国の協力分野ではどのような進展がありますか。

TICAD7へはジャン＝クロード・ガコソ外務・協力・在外コンゴ人大臣が参加し、河野外務大臣との外相会談で両国間の相互理解が進展しました。TICAD7では「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD）フェーズ2」が新たに発足しました。フェーズ2の目標は、30年までにサブサハラアフリカ各国の米生産量を2倍にすることです。CARDを運営する1機関として、JICAはCARD参加国であるコンゴ共和国の米の生産を支

援しています。TICADプロセスを通じて日本の協力がコンゴの発展に貢献していることに感謝しています。TICAD7の3カ月後の19年11月に、日本から矢野哲朗アフリカ開発協会会長がブラザビルを訪問し外務大臣、商業大臣と懇談し両国の関係を深めました。

■新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の脅威を乗り越えたら、両国関係に何を期待しますか。

COVID-19はすべての人々を攻撃します。COVID-19が終息するまでにはかなりの時間がかかり、困難が長引く可能性があります。しかし、COVID-19の世界的な流行が抑制され経済活動が再開され次第、大使館は、関係者が日本の関係当局と引き続き連絡を取り、二国間関係を深めるために共に前進することを願っています。すべての旅が最初のステップから始まることを考えると、私は、二国間関係が両国の当事者の貢献により、一定の発展を遂げると確信しています。

（聞き手＝編集長・田丸周）



コンゴ共和国
【人口】524万人
【首都】ブラザビル

Thankful for Japan's humanitarian assistance

H.E. Mr. Félix Ngoma
Ambassador of the Republic of Congo

— As the first Ambassador to Japan, how do you see the relationship between Japan and the Republic of Congo?

It is a great honor to serve as the first ambassador to fulfill the important mission of developing bilateral relations in this large country. Japan has provided valuable economic support to our country in many fields. I would like to thank Japanese Foreign Affairs Ministry, JICA and other technical cooperation institutions for the multifaceted assistance that I have always received since I arrived in this beautiful country two years ago. Japan and the Republic of Congo established diplomatic relations in 1960, and our relations have friendly developed. In the political area, Japan-Congo Parliamentarian Friendship League was launched in 2018. The delegation of this amical parliamentarians led by Mr. Sakurada, a member of the House of representatives, visited Brazzaville to exchange views with Prime Minister Clément Muamba, Minister of Commerce et Apportionments, and President of the National Assembly. Moreover in August 2018, the Congolese delegation led by Mr. Gilbert Ondongo, Senior Minister, Minister of State for the Economy, Industry and Public Finances participated in the ministerial meeting of The Seventh Tokyo International Conference on African Development (TICAD7). They met with Japanese Foreign Affairs Minister, Mr. Taro Kono.

— Would you talk about some of Economic cooperation from Japan?

Japanese Government's support to the Republic of Congo is active in several areas including health and education. Japan is making a great contribution, especially in the humanitarian assistance. Japan regularly brings donations to the Congo World Food Program (WFP) to support school canteens. This food program improves the nutritional situation of the Congolese children and ensures food security. This donation also can be used to improve quality of drinking water in certain areas. Furthermore, the Embassy with Japanese competent authorities collaboration,

intends to set up initiatives such as improving sanitary services. In 2018, Pointe-Noire small-scale fishing support center was constructed to improve the quality of marine products. In human resources development cooperation, many Congolese students were trained in Japan through "ABE Initiative: African Business Education Initiative for Youth".

— What progress has been made in the areas of cooperation between the two countries since TICAD7 last August?

The participation of Mr. Jean-Claude Gakosso, Minister of Foreign Affairs, Cooperation and Congolese Abroad, to the TICAD7 has contributed to increase mutual understanding between the two countries. In TICAD7, "Coalition for African Rice Development (CARD) Phase 2" has been newly established. The goal of the phase 2 is to double the rice production in each country by 2030. As one of the management organizations of CARD, JICA supports rice production in the Republic of Congo, which is a CARD member country. I am grateful that Japan's cooperation has contributed to the development of Congo through the TICAD process. In November 2019, Mr. Tetsuro Yano, President of the Association of African Economy and Development, visited Brazzaville to talk with the Minister of Foreign Affairs and the Minister of Commerce to deepen the relation between the two countries.

— What do you expect for our relationship once we can get through the threat of the new coronavirus (COVID-19)?

The new coronavirus attacks all people. It will be a long time before the COVID-19 end, and their difficulties may be prolonged. However, as soon as the COVID-19 pandemic is brought under control and economic activities reopen, the Embassy definitely hopes that the contacts will continue with the relevant Japanese authorities to move forward together deepening the bilateral ties. Considering that all journeys begin with the first step, I remain confident that bilateral ties will experience a certain development with the contribution of the two parties.

（Interview by Shu Tamaru, Chief Editor）

センコーグループ

JR京葉線「潮見」駅前に
ホテル オープン!

くつろぎと極上の美食を提供します。
一度、お立ち寄りになってください。

TOKYO EAST SIDE
HOTEL KAIE

東京都江東区潮見2-8-11 〒135-0052
電話 03-3699-1403
URL <https://www.hotelkaie.jp/>

Flatness

Flatness

Flatnessを極める
不二越機械工業株式会社

半導体・電子材料加工装置および周辺装置の開発・製造・販売

■本社 〒381-1233 長野県長野市松代町清野1650
TEL 026-261-2000 FAX 026-261-2100
<http://www.fmc-fujikoshi.co.jp/>

視点

大分県知事 広瀬 勝貞

県内全域に温泉地が分布し、その湧出量と源泉数が日本一を誇る「おんせん県おおいた」は、豊かな天然自然、そこで育まれた新鮮で安心安全な食材、貴重な歴史文化遺産など優れた観光資源の宝庫でもあります。

こうした魅力あふれる本県には、人口当たりの留学生数が全国トップクラスという特徴もあります。ここでは、この強みを生かした取組を2つ紹介します。

1つ目は、留学生の県内定着を目標

との交流拡大を図るものです。日本語パートナーズの派遣前に実施する研修では、立命館アジ

ア太平洋大学（APU）と連携し、ASEAN諸国の留学生の協力の下、現地の文化や言語についてより理解を深められるようにしています。また、派遣先の現地教師「カウンターパート」の研修では、地獄蒸し料理や足湯などの



留学生の活躍と地方創生の推進

に、就職や起業に関する支援を行う、おおいた留学生ビジネスセンター（以下「センター」）です。センターでは、インキュベーション・マネージャーによる起業相談や行政書士による在留資格相談、留学生と県内企業とのマッチング、就職に関するセミナーの開催などを行っています。また、起業時にオフィスとして低料金で利用できる起業支援室も設置しています。

2つ目は、国際交流基金の東南アジア地域との関係強化を目的とする「文化のWA」プロジェクトの中核事業である日本語パートナーズ事業です。この事業は、日本語パートナーズをASEAN諸国の教育現場に派遣し、各国

温泉文化体験や着物での城下町散策、APU留学生による大学や生活の様子の説明など、本県ならではの地域資源を活用した研修メニューを提供することにより、帰国後の授業の際にASEANの次世代の日本語を学ぶ人材に本県の魅力がしっかり伝わるようにしています。

こうした取組の結果、全国初となる外国人起業要件緩和適用や、ニッポンものづくりフィルムアワードでグランプリ受賞企業の誕生、ASEANからの留学生の増加などの効果が現れています。今後も、本県の強みである留学生の国際性や能力を生かして地方創生を進めていきたいと思っております。

カンボジア大使に面会、懇談



松澤建FEC理事長と湯下博之専務理事は、5月28日、カンボジア大使館にウン・ラチャナ駐日カンボジア大使、ハン・ソティーベン商業参事官、レット・ウドムブティナー二等書記官を訪問し懇談した一写真。大使は2018年9月に着任し、19年3月の第21次FECアセアン訪問団、5月のフン・セン首相来日時の表敬訪問などご協力をいただいている。



松澤理事長は、本年秋に実施予定のビジネスフォーラムについて、「医療、教育、AI、IT、スマートシティ、在宅勤務、農産物の加工・輸出、ハイレベルでの人材交流、農業、林業、漁業、建設業の人材受入等の分野に於ける我国トップレベルの代表者との打ち合わせにより、フン・セン首相の掲げる『カンボジア産業開発政策2015～25』の達成の為にFECはより具体的に協力していく」と述べた。

また、リネットジャパングループ(株)（黒田武志代表取締役社長）のカンボジアに於ける各種自動車修理工の為の研修、教育、日本に於ける実習への協力や、その他の分野におけるカンボジアの更なる近代化の為の努力も話し合われた。

論点 考え方の変化の声を高めたい

新型コロナウイルスをめぐる緊急事態宣言が5月25日に全面解除され、経済活動が再開され始めた。まだまだ予断を全く許さない状況で、東京では6月2日に東京アラートが発動され、いずれ感染第2波の到来は不可避だとも言われているので、感染の再度の拡大を防ぎつつ経済活動の再生を図るという綱渡りの日々が続くことになり気を許せないが、一つの通過点を経たことは確かである。

これまででは、突然の出来事にあわてふためいて、とり敢えず懸命に対応して来た面があるが、この段階でこれまでの経過を反省し、頭の整理をして今後に備えることが大切であると思う。

既に各方面で言われているように、再発に備えての医療体制の整備や、雇用問題をはじめとする経済や生活面での問題や、学校での授業の問題等について、問題点を大至急点検・整理し、財政面を含めて早急に対策を講じるべきことは当然である。

私達の生活の仕方についても、ポストコロナの生活はこれまでの生活とは変わるとして種々のことが言われている。デジタル文化とテレワークの普及や3密を避ける新しい日常等である。ただ、これについては、デジタル文化の普及は当然としても、中には詰めを要するものも少なくないように思われる。新型コロナのワクチンと治療薬が普及するまでの当面の話とその後とは異なる面があるように思う。

他方、何人かの人が指摘しているものの未だ大きな声になっていないテーマとして、人々のものの考え方や精神面の変化の問題がある。例えば、これまでの経済優先の生き方を見直して環境問題をも考えとか、人々の連帯とか人と人との共感や助け合いを重視するとかである。こういう声を高めたいと思う。

（専務理事・湯下博之）

6月9日付

FEC 活動日誌

7月の催しのご案内

◆8日（水）12時～14時

第135回欧州研究会（正会員限定）

講師 レーベル駐日ドイツ大使

主題 ビジネスフォーラム

会場 ドイツ大使館

◆16日（木）14時～16時

第231回国際研究会

講師 谷内正太郎谷内事務所代表・前
国家安全保障局長

主題 日本の外交と安全保障

会場 明治記念館

◆22日（水）12時～14時

第136回欧州研究会（正会員限定）

講師 ヨシペル駐日ルーマニア大使

主題 ビジネスフォーラム

会場 ルーマニア大使館

9月20日（日）～9月25日（金）に予定していましたが第6次モンゴル訪問団は、新型コロナウイルスの影響により延期致します。

詳細、最新情報は本協会ホームページ（<http://www.fec-ais.com>）をご覧ください。事務局（電話03-3433-1122）にお問い合わせ下さい。いずれも定員に達し次第締め切りとさせていただきますので予めご了承下さい。

化学の未来のオドロキ トキメキ

TOAGOSEI 東亜合成

More Imperial
than ever
130th

1890年（明治23年）、日本の迎賓館の役割を担い、東京・日比谷に誕生した帝国ホテルは、2020年11月3日に、開業130周年を迎えます。

「歴史にふさわしく、未来にふさわしく」

新たな感動の創造を目指し、

帝国ホテルの挑戦は、これからも続きます。



帝国ホテル

<https://www.imperialhotel.co.jp>



世界をつなぐ、
あたらしい空へ。

ANA Inspiration of JAPAN

A STAR ALLIANCE MEMBER

www.ana.co.jp